

第11章 図書・電子媒体等

武蔵工業大学図書館は、世田谷キャンパス図書館、横浜キャンパス図書館を以て構成されている。本学図書館は、永い伝統をもつ武蔵工業大学（以下本学）という、社会に直結した工学研究を中心とした大学の、いわば知的センターの役割を担ってきたが、社会の多様化・複雑化に応えるべく、大学自体を、より拡充・進化させようとする中で、図書館として出来る限りの改革・進化を図ってきた。最初に精力的に取り組んだのは、内外の知的情報の速やかな検索・参照を可能とする電子媒体の積極的な導入である。学生・教職員に広範囲に利便性のある電子ジャーナルの選択とラインアップの充実である。本学では、工学のみならず知識工学、環境情報学といった境界領域、学際的な領域などを幅広く教育・研究の対象とするため、多種多様な紙媒体の蔵書を有しており、それらと新しい電子ジャーナルなどとのバランスのとれた構成に努力してきたところである。

本学は、平成21年度より等々力キャンパスの2学部が加わる予定で、さらなる拡充・発展を期している。図書館も、それに対応すべく世田谷キャンパス図書館、横浜キャンパス図書館と等々力キャンパス図書館の3キャンパス相互の緊密な連携を漸次実現させつつある。基本となる考え方は、図書館利用者が3キャンパスのどこからでも同一のサービスが受けられるという点であり、そのために各種システムの統一化を図っている。

1. 到達目標

インターネット時代の「行かなくてよくなった図書館」から「行きたくなる図書館」を従来型の印刷媒体の所蔵資料、さらに図書館の場の利用を蔵書内容や設備など充実させることによって実現させる。この事によって入館者数、貸出冊数の増加を目指す。同時に研究者を中心としたオンラインジャーナル、データベース利用の非来館型サービスも積極的に導入し、「いつでもどこからでもサービスが受けられる」図書館機能も充実させていく。

そのため、各種の掲示や説明会さらに授業支援の一環として図書館サービスの実際を利用者に知らせる努力を積極的に行っていく。

a. 新図書館でのサービスの充実

昭和43年に開館した世田谷キャンパス旧図書館は、そのアクセスの悪さ、老朽化、更に狭隘化などで利用者より不満が多く（平成11年1月の利用者アンケート）、建て替えが急務となっていた。

平成17年度開館した新図書館はICカード、ICタグでの運用（この機能は既存の横浜キャンパス図書館でも同時に導入する）、全館でのインターネット接続可能など先端IT技術で利用者の使い勝手の向上を図る一方、寛げる空間を提供するため木製什器の多用、書架や閲覧機の余裕を持った配置などによって使いやすい図書館を目指し、入館者数の増加につ

なげる。

b. オンラインジャーナルを始めとするデジタルサービスの導入

工学、環境系ということもあり、オンラインジャーナルで利用できる雑誌については極力それを採用する。

この事によって利用者がいつでも、どこからでもアクセスできる環境を作る。また入手できる利用ログを精査し、無駄のない雑誌購入計画を立てられる。

さらに数あるデジタルデータベースへのアクセスに利用者が不便を感じないように、適切なポータルシステムを併せ導入する。

c. 利用者への図書館サービスの広報周知、利用者の目線に立ったサービス、情報リテラシーの充実

従来の図書館は資料等を完備することに専念し、後は利用者に自由に使ってもらおうという雰囲気だった。今後は、情報リテラシーを始め広報活動に重点を置き、図書館でどの様なサービスが受けられるかを積極的に利用者へ広報周知していく。

(ア) 図書、図書館の整備

【A. 世田谷キャンパス】

1. 現状説明

『資料の整備』： 図書の蔵書数は平成 20 年 5 月 1 日現在で 232,320 冊（大学基礎データ表 41 参照）である。本学では、平成 16 年の本学創立 75 周年記念事業の一環として新図書館を建設した。図書館では、この新図書館のオープン（平成 17 年 4 月）に先立ち平成 14 年度から平成 16 年度の 3 年間にわたり、和洋あわせ約 33,000 冊の除籍作業を行い、比較的経年変化を受けやすい工学関係図書の蔵書適正化を図った。開架図書は 206,578 冊、開架率は 88.9%である。新図書館では、蔵書は開架図書とすることを基本方針として、貴重図書、保存図書を除いて開架図書としている。収書は学生用の専門分野の図書を主眼としており、自然科学、工学関係書が毎年の受入図書の 60%超を占めている。選書については、各学科教員からの推薦、図書館職員の選書、学生の希望図書等合わせた体制で行っているが、特に学生希望図書については、平成 17 年度より、図書館ホームページ上での受付を開始したことで、従来の 4 倍から 5 倍のリクエストを受け、活発なニーズに応えた。また平成 18 年度には、従来、図書館で行ってきた指定図書制度を教務委員会、図書館委員会の承認により、教授要目（シラバス）に記載されている参考書を指定図書とする見直しを行い、一本化を図った。

＜表 11-1＞ 分野別収書冊数

	総記	哲学	歴史 地理	社会 学	自然 科学	工学・ 技術	産業	芸術	言語	文学	計
平成 17年度	431	75	384	347	950	2,258	91	356	103	252	5,247
平成 18年度	468	66	139	401	932	1,683	69	126	68	119	4,071
平成 19年度	390	83	208	375	697	2,216	88	188	64	93	4,402
計	1,289	224	731	1,123	2,579	6,157	248	670	235	464	13,720

総記に継続購入の文庫・新書を含む。製本雑誌は含まない。

定期刊行物は内国書 1,154 種、外国書 1,141 種を所蔵している（いずれも大学基礎データ・表 41 参照）。定期刊行物は工学系の図書館という特性もあり、重点を置いている。学術雑誌については、世田谷キャンパス図書館委員会において毎年その継続購入の見直しを行い、現状の教育、研究分野との齟齬がないか確認作業を行っている。電子化については、平成 17 年度に図書館委員会で電子ジャーナルを整備していく方針が決定し、従来の Elsevier 社の Science Direct に加えて、米国電子電気工学会 (IEEE) や英国電気工学会 (IEL) の刊行物のほぼ全てが見られる IEL Online や米国物理学会 (APS)、米国化学会 (ACS) など本学の研究分野に関わる専門分野の主要な学会の電子ジャーナルパッケージを導入した。また、電子ジャーナルパッケージの導入にあたっては、横浜キャンパスの図書館と適宜、相互連携をとって可能な限り全学共通で利用提供できる体制づくりを行い、世田谷キャンパスでも EBSCO Host と電子ジャーナル管理ツール AtoZ の利用が可能となった。この方針のもと平成 20 年度では 839 種の電子ジャーナルを提供している。さらに、これら電子ジャーナルの拡充に伴い、同じく平成 17 年度に、論文検索の効率化と引用情報の提供を目的として、新たに学術論文データベース SCOPUS を導入した。

<表 11-2> 世田谷キャンパスで利用できる主な電子ジャーナルと有料データベース

2008年3月現在

資料名	内容	利用
Science Direct	理工学分野の学術雑誌電子ジャーナル	世田谷 横浜
IEL Online	米国電子電気工学会、英国電気工学会電子ジャーナル	世田谷 横浜
APS	米国物理学会ジャーナル	世田谷
ACS	米国化学会電子ジャーナル	世田谷
ASCE	米国土木学会電子ジャーナル	世田谷
ASME	米国機械学会電子ジャーナル	世田谷
EBSCO Host	電子ジャーナル	横浜 世田谷
SCOPUS	学術論文データベース	世田谷 横浜
JDream II	科学技術文献データベース	世田谷 横浜
聞蔵 II ビジュアル	朝日新聞記事データベース	世田谷 横浜
MAGAZINE PLUS	雑誌・論文情報データベース	世田谷
建築雑誌 index	建築関係の雑誌記事データを収録したデータベース	世田谷
理科年表プレミアム	「理科年表」データベース	世田谷 横浜

視聴覚資料の所蔵数は2,790点（大学基礎データ・表41参照）である。語学資料を中心に所蔵していたカセットテープについては、新図書館への移行に際して、利用実績とICタグに非対応という点から利用を中止することとし、除籍を行った。新図書館では、DVD、CD、CD-ROMに加えて、日本図書館協会が提供サービスを行うELIB（図書館向映像資料ブロードバンド配信システム）を導入した。当初は、ELIBをサービスの中心と位置づけ、娯楽教養関係はELIBで賄う計画だったが、提供タイトルにメジャーなものが少なく、当館の意図に副わなかったため、ELIBは平成18年度で中止し、収集を従来のDVDに戻した。授業に関連する視聴覚資料は、随時、教員からの推薦を受け付けて購入したが、分野的には建築関係が多かった。CDは、主に語学関係のセットを備えた。

施設面では、上述のとおり、当該期の特筆事項として新図書館の完成がある。新図書館は平成16年に竣工し、平成17年4月より開館した。「学習図書館機能に重点を置いた総合図書館」を目指した新図書館は、キャンパスの中央に位置している。建物は地下1階地上4階の独立棟で面積は約5,850㎡と、旧図書館に比べ2倍強の広さで、座席数も555席から665席となり、エレベーター3基を備え、身障者用トイレも設置した。またハロン消火設備を備えた貴重図書室も設けた。

新図書館は、館内すべての箇所でもLAN接続が可能で、どの階、どの場所でもパソコンが利用できるよう情報環境を整備した。また設備機器においても先進のIT機器を多く導入し、工学系の学部を有する大学図書館として充実を図った。情報検索端末はOPACとして1階に7台、地下1階・2階・3階に3台、4階に2台設置している。地下1階はメディアライブ

ラリーと称し、AV 資料の視聴用パソコンを 8 台、42 インチのプラズマディスプレイ 2 台、インターネットの利用とビデオ編集や 2D・3D 処理等が可能なパソコンを 18 台設置している。また LAN、プロジェクタなどの装置が揃った 10 数名が利用できるプレゼンテーション室が 2 室、40 名程度が利用できるメディア学習室を設け、各種データベース講習会や研究発表の場として活用している。メディア学習室は、遠隔対応のほかコンテンツの収録、配信システムも備えている。さらに、これらのうち予約制としている施設については、施設予約システムにより図書館ホームページから、直接利用状況の確認と予約ができる。またパソコン専用ロッカーを設置して、パソコンを所持しない利用者に対して館内専用のパソコン貸出を行い利用者の便を図っているが、このロッカーの貸出と返却、図書館の入退館、前述の予約施設の開錠、施錠は、すべて IC カード（学生証・身分証）システムによって管理している。

<表 11-3> 新図書館の IT 設備とシステム

システムの種類	運用内容
IC カードシステム	入退館管理・施設予約・自動貸出処理・貸出用 PC ロッカー管理
IC タグシステム	資料管理（自動貸出処理・不正持出防止・蔵書点検）
マルチメディアシステム	デジタル情報掲示板・遠隔会議・AV 視聴・コンテンツ制作
プリントシステム	複写機利用サービス

<表 11-4> 情報機器設備状況（単位：台）

	インターネット接続 PC							AV 視聴	情報 掲示板	コピー 機
	一般	MAC	画像 処理	ノンリニア ビデオ編集	館内貸出 ノート PC	所蔵検索 (OPAC)	CD-ROM 検索			
設置数	4	4	6	4	17	18	1	8	12	5
合計	49							8	12	5

利用サービス

新図書館では、従来の磁気テープ方式に変えて、IC タグによる資料管理を導入した。IC タグは、工学系の図書に多い CD-ROM などの付属資料を含むほとんどの開架資料に貼付し、自動貸出機での同時複数冊処理と未手続き図書の持出し防止に大いに効力を発揮している。視聴覚資料（DVD、ビデオ等）への貼付では、現物が直接手に取れるため職員を介する必要がなく気軽な視聴が可能となった。また蔵書点検でも作業が簡便化して休館期間が短期化した。

運用面では、新図書館への移行を期に閲覧カウンターの業務委託を開始した。これに伴い利用者からの要望が多く、予てから懸案としていた開館時間の延長について、平成 17 年

度後期より、試験期の開館を通常より2時間延長した22時とし開館延長を実施した(大学基礎データ・表42参照)。施設の運用では、平成19年より1FロビーをTOSHOKAN Galleryとしてパネル展示スペースに利用し、学内の情報交流の場として活用している。利用例として、大学の歴史、授業でのポスターセッション、学生の課外活動勧誘、発表などがあつた。

図書館システムは横浜キャンパス図書館と統合したシステムで運用している。平成18年にはリプレイスを行い、新しい業務システムでの運用を開始した。これを機にキャンパス間の資料の取り寄せと予約、学生希望図書の申込み等をホームページのオンラインサービスに移行し、資料提供の迅速化、簡便化を図った。

資料の利用では、平成19年度より、視聴覚資料を館内利用としていた従来の制限を見直し、音楽CDの館外貸出を開始した。電子資料の利用については、利用講習会の開催、情報リテラシーの授業支援での説明など機会を設けて案内し、利用の促進を図った。

地域への開放は、一般開放として行っており、ホームページで案内している。平成19年には、世田谷区教育委員会の要請により「大学と世田谷区教育委員会との大学図書館の世田谷区民の利用に関する覚書」について調整を行い、平成20年度に締結の予定である。

<表 11-5> 図書館の利用状況

	H17	H18	H19	平均		新館/ 旧館比率
				H14~H16	H17~H19	
入館者数(名)	237,920	211,624	210,014	124,419	219,852	1.8
貸出総数(冊)	59,897	66,317	58,541	44,433	61,585	1.4
学生希望資料購入 依頼受付件数(件)	576	472	401	143	483	3.4
SC⇄YC相互利用 (貸出)件数(件)	890	1,272	1,268	635	1,143	1.8
SC→YC	502	674	722	362	633	1.7
YC→SC	388	598	546	273	511	1.9

SC：世田谷キャンパス図書館 YC：横浜キャンパス図書館

2. 点検・評価、長所と問題点

世田谷キャンパス図書館では、各種ITを導入して新図書館の施設設備の整備、利用に関わる各種手続きの簡便化、迅速化、運用面での改善等を図った結果、年間利用者数は新図書館が開館した平成17年度から3年間で平均219,852名(各年度の数は大学基礎データ・表42参照)となり、直近平成14~16度の平均124,419名に比べ約1.8倍に増加し、貸出実績にも反映している。加えてこれらには、試験期の開館時間延長による入館者も含まれている。実際の利用面でもメディアライブラリーで自由にAV資料が利用でき、CD-ROMの付

属資料も本誌と一緒に利用手続きが済ませられるなど利用者にとっての利便性の向上が図れた。座席数は655席で収容定員に対する割合も17.4%（大学基礎データ・表43参照）と向上した。また、座席と机は、スペースを十分にとっているため6人掛けで空席がなくても圧迫感なく利用でき、落ち着いた雰囲気学習空間となっている。

新図書館への移行によって、図書館が施設（場）として求められる利用サービスは、良好に果たしていると思われるが、開館について、月末休館日に来館する利用者があり、図書館として通常授業時であることを考慮した休館の見直しと図書に囲まれた学習空間の創造という設計コンセプトのもと壁面書架が多いため、複数の書架の種類があり、書架と書架の繋がりが分かりにくく戸惑う利用者がいることから館内サインの工夫と充実が必要である。

ネットワーク完備によるパソコンの利用環境と館内専用貸出パソコンを含めたパソコンの設置は、本学学生の学習形態に適合し、図書館利用の目的として定着している。さらに、平成19年度には、課題「IT機器と業務委託による図書館利用者サービスの拡充」が、私立大学経常費補助金特別補助の学習と教育方法の改善に採択され、現在、策定案の実現を図りつつある。

図書館ホームページは、学生希望図書受付、館内施設予約などの新しいWebサービスと業務システムのバージョンアップによる利用状況照会、キャンパス間の資料予約が可能となり、活発な利用が実績にも現れている。また、配架マップの作成によって、OPAC検索結果画面から配架場所が分かるようになったが、現在のシステム（X00PS）では、掲出できるメニュー項目の表示数に制約があり、電子資料の区分などで一部内容が混同している。

資料の整備では、図書で平成17年度まで行っていた教員に専門分野の選書を委ねる選書担当者制度を廃止した後、体系的な資料の整備を図るべく指定図書とシラバスに記載の参考書とを一本化した。個々の資料についての所蔵調査と購入については、予算、作業量の両面で遂行が難しい状態にある。指定図書とシラバス記載の参考書をリンクさせて教務関係との連携を進めたことは、今後、資料の整備だけではなく、図書館OPACとWebシラバスの連携を視野に入れることが出来るようになり、利用サービス面でWebシラバスとOPACとの相互リンクの実現によって、授業に役立つ図書の所在情報、貸出情報の迅速な提供という大きなメリットが期待できる。雑誌では、外国雑誌の電子ジャーナルへの移行を進め、包括的なパッケージの導入により学術情報基盤としての整備を進めているが、予算的には値上がり、契約規模の維持など年々厳しい負荷状況が増大しており、その影響が他資料の購入縮小へと波及し、新たな問題となっている。この対処として、PULC（国公立大学コンソーシアム）への参加、私工大懇話会（首都圏の工科系13大学のグループ）で協力体制をとるなど、有利な条件での購読に努めている。内容的にも、和雑誌の電子ジャーナル、電子ブックの導入とともに学生用としての利用提供が弱い。

地域への一般開放については、快適な空間を実現した新図書館をサロンのように利用されることを懸念し、学園祭開催時の図書館見学のみで積極的な案内を行って来なかったが、新

図書館オープン後、3年を経過して在学生の利用状況も把握できたので、前向きな対応を考えなくてはならない。

3. 改善方策

資料の整備で、図書館予算削減に伴う資料関係予算の減少が資料購入の窮状の起因となっているため学生用の資料関係予算が一定水準保持できるようにする。そのために、他大学の現状を調査し、図書館委員会で具体案を策定し、上申する。また、シラバスと連携した指定図書の整備により、体系的な蔵書構築と学習用図書館としての充実を図る。さらに、学生用の電子ジャーナル、電子ブックを導入して、情報探索のリテラシーを実践できるようにする。そして、電子ジャーナル、データベースの導入にあたっては、横浜キャンパス図書館との連携を強化して、包括的な検討と選択を行い、予算の有効活用と学術情報基盤を推進する。運営面では、月末休館日に行う各種機器設備のメンテナンスの効率化を図り、資料の移動では新たに部分開館などを実施するなど開館に向けた柔軟な対応を検討する。

一般開放は、世田谷区報、地域情報誌に利用案内を掲載して広報活動を行うとともに、希望者には登録制で利用者証を発行し、貸出可能など利用内容の拡充を検討する。

【B. 横浜キャンパス】

1. 現状説明

資料の整備：

横浜キャンパス図書館は創設当時から“環境と情報”をキーワードとして学生のモニターにも選書に参加してもらい、継続的・積極的に資料の収集を行ってきた。現在、蔵書数は92,536冊（大学基礎データ・表41参照）。しかしながら、全利用者を対象として実施したアンケートでは、図書資料について、平成12年のアンケートで30.1%、平成17年では28.9%の学生から「資料が不足しているので、図書館を利用しない」との回答（教職員の回答でも8%）があり、資料の充足を最重点とし増冊に向けて努力をしている。

定期刊行物（内国書453種、外国種163種—大学基礎データ・表41参照）については、平成17年度に電子ジャーナルパッケージEBSCO Host導入以降、電子ジャーナルを増加し冊子体からの移行を図り、書庫の狭隘化軽減、製本費削減にも役立っている。国内誌についても電子化されているものは電子ジャーナルを購読するようにしている。

視聴覚資料では、平成19年度より音楽CDの館外貸出を開始した。視聴覚資料（4,057点～大学基礎データ・表41参照）の媒体はビデオからDVDに変化してきている。本図書館でも新規に購入する場合はDVDとしている。

＜表11-6＞ 分野別収書冊数

	総記	哲学	歴史 地理	社会 科学	自然 科学	工学・ 技術	産業	芸術	言語	文学	合計
平成 17年度	2,590	119	626	1,553	610	1,163	492	382	369	191	8,095
平成 18年度	1,275	104	665	1,427	669	984	418	289	365	98	6,294
平成 19年度	1,307	98	512	1,459	690	1,037	427	241	329	76	6,176
計	5,172	321	1,803	4,439	1,969	3,184	1,337	912	1,063	365	20,565

総記に情報と継続購入の文庫・新書を含む。製本雑誌は含まない。

施設の整備：

世田谷キャンパス図書館の新築と合わせて横浜キャンパス図書館でも全面的にRFID（Radio Frequency Identification）化した。また、平成18年には貸出返却機を2台に増設し、利便性を高めた。これにより、貸出・返却業務の自動化が図れた。

検索端末は7台（1階6台、2階1台）CD-ROM検索端末3台、スキャナ専用端末機2台を設置している。視聴覚システムは創設時からの3台（3人掛け）を平成18年に入替、平成19年にはブースを新たに5台増設して13台とし、授業で視聴覚の視聴を推薦された場合の混雑にも対応できるようにした。

図書は出来るだけ利用者の目に触れ、手に取って見ることが望ましいとしてきたが、書架が不足して来たため、一般書架を平成18、19年と増設し、文庫や新書用ラウンドケースも増やしてきた。（図書館は地下1階、地上2階で総面積1,442㎡、書庫収容可能冊数112,222

冊～棚板延長÷0.9×25で計算、座席数196席～大学基礎データ・表43参照)

また、一般雑誌コーナーの椅子をソファ型からチェア型に入替えて、学生のマナーを向上させた。癒しの場所として、館内の緑化にも心がけてきた。

利用サービス：

R F I D化に伴い、どのキャンパスの学生・教職員も身分証明証があれば、入退館・図書の貸出・返却が可能となった。また、両キャンパスの図書の取寄せや、複写もそれぞれの図書館に出向かなくても可能とした。年度初めの新入生向けライブラリーツア、研究室単位のライブラリーツアも継続して行ってきた。また、電子ジャーナルパックの使用説明会も開催してきており、電子ジャーナル、データベースもかなり利用されている。

開館時間は9時から22時（平成13年4月より、それ以前は20時）までで、17時以降閲覧カウンターをアルバイト1名としていたが、平成19年度後半よりアルバイト2人体制とし、学生のクイックレファレンスに対応できるようにした。

視聴覚資料の視聴時間では時間延長への希望が図書館学生モニターから出され、2時間から2時間30分に延長し、17時以降も館内での貸出を21時、返却は22時までとした。

平成17年の学生アンケートで図書館職員の態度に対する不満もあげられていた為、図書館職員の対利用者への態度を改め、学生の意見には真摯に対応するように心がけてきた。

地域への開放については、図書館の面積、閲覧席等の関係もあり、学生の利用を優先し、原則として、学生の授業がない土曜日だけの開放（平成13年4月より開始）とし、年齢も18歳以上としている。利用者には資料の閲覧、複写および視聴覚資料の視聴も認めており、リピーターとなる人が多い。市民大学講座の出席者に対しても利用を認めている。

2. 点検・評価、長所と問題点

横浜キャンパス図書館では、上述のアンケート結果を踏まえて図書委員会で検討し、図書館学生モニターからの意見も吸い上げて、館内整備・資料の収集を続けてきた。学生モニター制度は、創設当時からあり、学生モニター・図書委員・図書館職員が一堂に会して学生の声を直接聞いたり、選書に加わってもらったり、オープンキャンパスの際など図書館の案内をしてもらったりしてきた。その際の学生の意見、要望も図書委員会で検討を加え、図書館運営に反映させてきた。これらのことは、本図書館の長所として挙げられる。

創設から12年、手に触れて探せる資料をという開架運営の方針のもと、学生の満足が得られるようレファレンスブック、環境・情報関係の専門書の増冊、教養、娯楽の一般書や新書・文庫の増冊を図り、その対応のため館内設備の整備を行ってきたが、現在の蔵書約9万冊余を開架書庫に収めることはできず、年々閉架書庫への移動が増加している。そうした状況にありながら、学生アンケートでは資料の不足が挙げられている。近年は、利用者の利便性を図るためデータベース、電子ジャーナルを学内どこからでも検索可能とし、非来館型のサービスも進めている。それに因るだけではないと思われるが、図書館の入館者は

年々下降傾向にあり、図書館では利用向上のため、ライブラリーツアー（新入生向け、研究室向け）、電子ジャーナル講習会等を行ってきたが、参加者は上昇線ばかりではない。

施設面の問題点としては、個室がなく、グループ学習室も1室のみで不足している。現在、2階閲覧室の一番奥に区切りのついたキャレルデスクを設置しているが、一番奥の席は常に使用されており、個室利用希望は高いと思われる。また、RFIDを取り入れているが、入口（フラッパーゲート）は創設当時のものを使用しており、ゲートの開錠が手動のため入退館に対する学生の不満は多い。また、情報メディアセンターの中に図書館があるため情報演習室での授業終了後の学生の話声そのまま図書館に入る。時間的には短いが、授業終了の度ごとに音が響き、利用者の迷惑となる。がその反面、図書館内のインターネット利用パソコンは4台だが、演習室ではインターネット検索が可能であり、まだ研究室の所属がない1～2年生の場合は便利だというメリットもある。

3. 改善方策

資料の整備では、今後も利用者が満足できる蔵書数の増加はもちろんであるが、内容の充実を図り、電子ジャーナルに加えて電子ブックを導入する。図書館の面積拡大がなかなか望めないのであれば、図書館資料のデジタル化は必須であり、電子ジャーナルはもちろん図書、特に大型の参考書やシリーズ物は電子媒体がある場合は出来るだけ電子図書に切り替えて、小型の器でも大型の中身を目指したい。視聴覚資料では、音楽CDの館外貸出は継続して進めていくと同時に視聴覚資料数の増加も図っていく。

施設面では、面積の拡大ではなくとも、共同研究室を増設するか、個室などを2～3室確保はしていかなければならないだろう。

利用サービスでは、図書館ホームページの充実、ライブラリーツアー（新入生向け、研究室向け）、電子ジャーナル講習会を継続・充実させて行くと同時に、電子ブックの利用案内も行っていきたい。

以上の改善にあたっては、図書館学生モニターの制度をより強化し、モニターの意見を尊重しながら図書委員会を中心に進めていく。

(イ) 情報インフラ

『学術情報の処理・提供システムの整備状況』

1. 現状の説明

本学では、世田谷キャンパス図書館、横浜キャンパス図書館ともに国立情報学研究所の大学図書館等の総合目録データベース(NACSIS-CAT)に参加し、書誌作成と所蔵登録を行っている。新規購入図書と雑誌は、ほぼすべてNACSIS-CATでの書誌検索、書誌作成を経て、所蔵登録、アップロードを行っている。そして、それらの蔵書データは、図書館ホームページのOPACにより、検索可能となっている。学内資料では、修士学位論文の抄録があり、横浜キャンパスでは平成12年からホームページで公開している。また、「環境情報学部紀要」

および「情報メディアセンタージャーナル」も環境情報学部ホームページから全文が閲覧できる。

学術情報の入手としては、国立情報学研究所のG e N i i（学術コンテンツ・ポータル）を利用しており、C i N i i（N i i 論文情報ナビゲータ）については、年間定額利用の契約をしている。科学技術論文関係では、科学技術振興機構（JST）が提供する文献情報データベース（JDreamII）を利用している。CiNii、JDreamIIは、大学院生はもちろん学部生の利用も多く、頻繁に利用されている。なお、外国文献の情報アクセス手段としては、平成17年度より導入した学術文献データベース Scopusがある。このほか各キャンパス図書館で専門分野に副ったデータベースを利用提供している。

次に、本学では増加する蔵書を合理的に管理し、利用者により良いサービスを提供するために、コンピュータによる目録データベースの構築を計画し、昭和63年より蔵書管理システム（富士通：ILIS/M）の運用を開始した。その後、平成9年4月の環境情報学部開学にあわせ、システムのバージョンアップ（富士通：ILIS/X-WR）を行い、工学部・環境情報学部両学部の蔵書統合管理システムの運用を開始した。以降、世田谷キャンパス図書館、横浜キャンパス図書館では、同一システムで運用している。

さらに平成18年のバージョンアップ（富士通：iLiswave/J）により、図書館システムもWebアプリケーションに進化を遂げ、それとともにインターネットを利用した様々なオンラインサービスを本格的に導入した。現在では、蔵書検索（OPAC）、NACSIS-Webcatの検索、利用状況照会はもちろんのこと、貸出延長・予約・購入依頼の各種サービスを、基本的に24時間・365日利用者へ提供している。

また、今般誰もが身近に持ち歩く情報端末である「携帯電話」からのモバイルサービスを開始し、図書館サービスはいつでもどこから誰でも利用できるものとなった。さらに図書館から積極的に情報提供を行うため、メール自動送信サービスを開始し、貸出している図書の返却期限日や予約した図書の状況などを知らせている。OPACは平成19年のバージョンアップにより、所蔵情報からフロアマップの動的リンク作成やQRコードを利用した書誌・所蔵情報提供など新しい機能が加わった。

このように充実を進めたホームページは、現在、情報提供にとどまらず、上述の学術情報、商用データベース、電子ジャーナルへのアクセスの窓口であり、情報サービスの基幹として重要な役割を果たしている。さらに、OPACの検索結果から電子ジャーナルへのリンク、逆に電子ジャーナル、データベースからOPACへのリンク表示も行っている。

2. 点検・評価、長所と問題点

学術情報は、ホームページを拠点に、24時間・365日どこでも図書館サービスの一環としてOPAC、電子ジャーナル、データベースへアクセスが可能で、シームレスで効率的な検索と入手ができるようになった。

問題点としては、電子ジャーナルから OPAC へのリンクボタンの設定でタイトルの選択が出来ず、冊子体を所蔵しないタイトルもすべてリンクボタンが付いてしまうため、OPAC にとんだ利用者が、該当なしの結果を得ることが挙げられる。

3. 改善方策

ポータルサービス・モバイルサービスにおいては、更なる機能充実を検討していくことはもちろんであるが、学生・教務サービスと積極的に連携を図り、大学全体のポータルとしての役割も検討する必要がある。

OPAC については、商用データベース・電子ジャーナルなどインターネット上の情報資源を対象とした連携をし、学生の多様性、利用目的に配慮した検索・連携サービスの提供が課題となる。学内においては、シラバスと相互連携し、カリキュラムと密接に関わりを持つことで、学生の図書館への来館を動機づけていくことも必要となる。

また今般のインターネットでは、双方向の情報流通で形成される情報が大きな情報源の1つとして認知されている、図書館サービスにおいても従来までの一方的な情報発信に限らず、ユーザレビューやデジタルリファレンスなどを実装することで、双方向での情報流通を行うことができる環境を構築することも大きな検討課題のひとつである。

『国内外の他大学との協力の状況』

1. 現状説明

大学図書館とのコンソーシアムについては「私立大学コンソーシアム (PULC)」に参加し、オンラインジャーナル等の適正価格での購入に努力している。また、工学系の同系図書館コンソーシアムとして東京理科大学、芝浦工業大学など首都圏工学系単科大学 13 大学で構成される「私工大懇話会図書館連絡会」があり、利用者サービス向上のための情報交換をはじめ、相互の閲覧、貸出など活発な活動を行っている。なお、地域的なコンソーシアムとしては同じ世田谷区内の大学(東京農業大学、駒澤大学など)と「世田谷 6 大学コンソーシアム」を組み近隣のメリットを活かした活動を行っており、平成 17 年度からは蔵書の横断検索を実施している。横浜キャンパス図書館の地域連携としては、神奈川県内大学図書館相互協力協議会および横浜市内大学図書館コンソーシアムに参加し相互利用を行っている。国立情報学研究所 (NII) の ILL システムに参加し、相互貸借・文献複写等の相互協力サービスを積極的に運用しているが、さらに平成 19 年度からはこのシステムの料金相殺サービスに横浜に続き世田谷キャンパス図書館も参加し、より効率的な運用を図った。また同じ NII の目録所在情報サービスにも参加し、目録データ作成の迅速性、正確性に努めている。

2. 点検・評価、長所と問題点

「私工大懇話会図書館連絡会」は各加盟図書館の所蔵資料を教員、学生が相互に利用し一定の成果が出ている。

＜表 11-7＞ 私工大懇話会図書館連絡会 文献複写実績(平成 19 年度)

加盟 大学	工足 大 利	工神 奈 大 川	工 大 学 院	工 崎 大 玉	工 芝 大 浦	工 湘 大 南	工 千 大 葉	工 東 科 大 京	工 東 芸 大 京	電 東 機 大 京	理 東 科 大 京	工 日 業 大 本	工 武 業 大 蔵	合 計
文献複写 依頼件数	25	255	371	108	588	47	138	36	78	152	155	29	134	2116
文献複写 受付件数	25	112	22	5	260	60	82	13	100	296	500	5	137	1617

さらに管理職が定期的に集まり、専任職員とアウトソーシング、補助金など大学図書館が持つ共通の問題を論議し図書館運営に役立てている。「世田谷 6 大学コンソーシアム」では平成 17 年度より各大学の所蔵が一覧できる横断検索システムを各大学の図書システムに導入し利用の促進を図っている。ただし、本学の所蔵資料が工学系中心のため相互利用の実績は多くない。また参加大学の個々の事情により、利用者が教職員と院生だけに限られており利用の限界も感じられる。

他大学との協力関係は上記に述べたように協定、それを支えるシステムも一応揃っている。しかし図書館職員が業務として扱う事象を別にする、学生・研究者の利用については活性化されているとはいいがたい状況である。

3. 改善方策

制度は作ったが、利用者への宣伝、告知が不十分に思う。さらに相互利用の活性化を図るために、今後は情報リテラシーや各種講習会また図書館ホームページなどを利用して、この制度のメリットを利用者に周知していく。

『学術資料の記録・保管のための配慮の適切性』

1. 現状説明

世田谷キャンパス図書館では、従来、除籍については慎重であり、特に研究用図書については除籍がほとんどされていなかった。工学系図書については、その価値半減期が短いこともあり、適切な蔵書構成は利用者サービスの向上にも繋がると考え、図書館委員会のチェックのもと不要本の除籍を行っている。

また旧図書館では閉架書庫に別置されていた「蔵田文庫」を始めとするコレクションを、新図書館では貴重図書室を作り閲覧し易くした。この結果、学内だけではなく外部の研究者にも公開できるようになった。

教員の研究業績は、オリジナルのコピーを教員ごとにファイルし、閲覧可能にしている。また研究論文のタイトル名、掲載誌等を載せたデータを研究活動一覧として大学のホームページで公開している。

教員の著作本については積極的に収集し「教員の本」のラベルを貼り、利用者の注意を喚起している。また一部は本校の広報誌である「Mi-Tech Quarterly」に載せ、周知に努めている。

横浜キャンパス図書館では開学当時、学生が図書を手に取ってみるものの有意義性を説かれたが、蔵書の増加に伴って地下の保存書庫に配架する率が高くなってきた。

2. 点検・評価、長所と問題点

世田谷キャンパス図書館では新図書館での書架の増大、除籍さらに電子ジャーナルの積極的な導入によって書架スペースの問題は払拭された。研究業績の保存は昭和46年からスタートし、35年以上の実績を重ねている。しかし図書館へのコピー提出が個々の教員の任意になっているため、網羅性に問題がある。

3. 改善方策

横浜キャンパスで問題になっている書庫の狭隘化は、電子ジャーナルで見ることが可能なものは電子ジャーナルを入れて行く方向で軽減に努める。

研究業績については、今後業績評価と連携する形で、研究業績の集約システムを構築していきたい。また現在オリジナルはコピーでの提供のみであるが、今後は著作権の問題をクリアしながら、機関リポジトリ(例えばD-Space)を採用し、広く情報の公開に努めたい。

【C. 等々力キャンパス図書館】

本学等々力キャンパスに平成21年度より都市生活学部と人間科学部の新設を予定している。なお等々力キャンパスには、現在東横学園女子短期大学（設置学科：保育学科、ライフデザイン学科）の図書館（1,838.99㎡）があり、新設2学部の図書館に転用される。

蔵書内容としては新学部の独自性を待つが、システムとしてはICカード、ICタグ、図書館システムなど3キャンパスで共通利用にし、どのキャンパス図書館からでも同一のサービスが受けられることを大前提とした。

以下概略を述べる。

資料の整備：

東横学園女子短期大学図書館には、短大の設置学科の変遷に伴う、国文学、英文学、家政学（衣・食・住分野）、児童学分野の図書約169,000冊（内洋書約22,000冊）を所蔵している。新設される2学部のうち、都市生活学部では、学部完成年度までに年次計画で約6,000冊（内洋書約1,000冊）の専門分野図書の購入を予定しており、東横短大の蔵書からの転用分の約7,300冊と併せて、約13,300冊の専門分野図書を所蔵することになる。その学問分野としては、都市文化（文化、ビジネス、経営学、商学等）、都市経営（都市計画、まちづくり、都市政策等）、都市居住（建築、住宅、環境等）の専門科目3領域の関連分野に特化した整備計画とし、より希少な図書や隣接分野の閲覧希望に対しては、世田谷および横浜図書館の蔵書で対応する。一方、人間科学部では、東横短大保育学科の図書約7,400冊の転用および、学部完成年度までに新規購入する約1,000冊（内洋書約100冊）を加え、合計約8,400冊の蔵書構成計画を立てている。その学問分野としては、教育学、児童学、福祉学、家政学が中心となる。

定期刊行物については、都市生活学部が学部完成年度までに約130タイトル（内外国雑誌約30タイトル、電子ジャーナル・電子データベースを含む）を新規購読する。これ以外の学術雑誌等へのニーズに対しては、世田谷および横浜の図書館で継続購読している定期刊行物をもって対応する。バックナンバーについても同様に取り扱う予定である。

また、人間科学部では、東横短大保育学科用に継続購読している30タイトル（内外国雑誌7タイトル）を基礎に、新規購読予定の学術雑誌等約30タイトル（内外国雑誌6タイトル、電子ジャーナル・電子データベースを含む）合計約60タイトルで構成する。

以上に加えて、視聴覚資料については、都市生活学部で約50点を新規購入し、人間科学部では、東横短大保育学科用に購入済み約70点に約30点を新規購入し、合計100点とする予定である。

利用サービス：

等々力キャンパス図書館（現東横学園女子短期大学図書館）は、鉄筋コンクリート地上2

階地下1階建てで、総床面積1,838.99㎡であり、現座席数は129席である。館内にはレファレンスルーム、AV・ビデオルーム、約14台のパソコンを常備し、インターネットによる情報収集や文献検索ができるコーナーを設置している。

等々力キャンパス図書館は、武蔵工業大学との統合に伴い、世田谷キャンパス図書館、横浜キャンパス図書館と強力なネットワークを構築し、利用者である学生・教職員の利便性を高める計画を進めている。具体的には、入退館、図書貸出しを共通の学生証（ICカード）で対応できるようカードの標準化を実施し、本学学生はどの図書館にも自由に入退館が可能となり、どこの所蔵資料でも自由に借り出せるシステムを構築する。また同一の図書館システムによる運用を計画しており、パソコンや携帯電話による所蔵資料の検索や各種サービスも学内、学外から自由にアクセスできるようにする。また、全学統一のICタグによる蔵書管理に向けて、資料へのICタグ貼付を行い、準備を進めている。